

# 第一二八話

## 丹波目代主早馬事頼光朝臣進奏事

『前太平記』上 卷第十九 三八九頁から三九〇頁より

その年も暮れて翌年の春、再び過ぎ去った貞元の年中<sup>(老)</sup>起こっていた時のように

又去んぬる貞元年中の如く

都田舎の男女が多く消え去って、大きな泣く声の家々に広がって、不憫であった有

都鄙の男女多く失せて、 啼哭する声家々に満ちて、

様である。これはどういうことが起こっているのだろうか、不思議に思い怖がらないというものはいない。このようなことが起こっていたところに、丹波の目代<sup>(武)</sup>の藤原保友が元から、早馬を参らせて報告したことは、「この国は言うに及ばず、近くの国の老若男女を分別せず消え去りますことによって、その父母一族はすみず

近国の男女老少を分かず紛れ失せ候に依つて、 其父母眷属普く

みまで捜し求めるといっても、全くその行方は知れません。そこで国中を捜し求め

尋ね求むと雖も、 更に其行方知らず候。

たところに、この国の大江山<sup>(参)</sup>に城を築き、異類異形の逆徒共が集まり住んでいます。この城の構えは普通ではなく、石を積み重ねて塀となり、岩に穴を開けて門と

した。ところが今月上旬、その首領は何を思ったのだろうが、それ以外の仲間はある城（大江山）に留めておいて、自分自身はたった七、八人を従えて、丹後国千丈が嶽<sup>(肆)</sup>というところに岩窟を構え、その中に閉じこもって住んでいますような噂がある。それでいてその賊は、神変自在で、その上人間の力でない。空中を飛び、姿

中を翔り

を隠し、急に風雨を起こし、刀の刃を使わないで人をつめで裂き、牛・馬・羊・

形を隠し、 俄爾に風雨を起こし、 刀劍の刃を借らずして人をつんざき、 六畜を

犬・鶏・豚を掴み裂くような、様々な幻術使い、人々は恐怖しないという者はおら

掴み裂く、

ず、両国（丹後・丹波）はこれのせいで悩まされる。早く討手をお下しにならない

早く討手を下されずんば、

ならば、ついに天下の御一大事になりましょう」と奏上した。

天下の御大事に及び候はん」

諸卿が評議して「このような前例はなくもない。昔千方<sup>(伍)</sup>に仕えた、金鬼・風

斯かる先蹤なきにしも非ず。

鬼・水鬼・隠形鬼といった四人の鬼も、千方が朝雄<sup>(陸)</sup>に倒されてから、突然通力を失って、どことも知れず逃げ消えた。また伊勢国鈴鹿の鬼神<sup>(漆)</sup>も坂上田村麻呂によって滅ぼされる。それゆえ天智・桓武の時代の先例に従って、力量のある武士を選

んで、誅戮するのがよい」と決めたので、摂政兼家がおっしゃったのは、「これこそ去年、日吉神社が神託なされたことである。現在天下の武士の中に、妖怪を退治することができるものは、一人、頼光だけである。彼に命じよう」とおっしゃったので、貴族たちはこの評議に同じくして、すぐに頼光朝臣をお招きして、云々のことであり、急いでその場所に出発して退治させるべき事情を命じ含められる。頼光は謹んで承って、差し支えなく勅答を返して自宅に帰った。藤原保昌も身内の者であ

藤原保昌も縁者たるに依つて、

ることによって、今回の出陣頼光一生で一番の一大事、一緒に出向き下って誅戮の

今度の出陣頼光生涯の大事、 共に罷り下って誅戮の

力添えをしたいという話を（保昌が）強く申し上げたことで、すぐに勅命による許

力を加ふべき由、 達て望み申しける程に、 即ち勅許ありければ、

しが出たので、保昌は格別に喜んで、急いで頼光朝臣の元に向かって行き、合戦の

保昌斜めならず喜びて、 急ぎ頼光朝臣の許に行き向かつて、

評議を区々に行うのである。しかしその者は不思議な力を持つ計りがたい者、たと

合戦の評定区々なり。 され共彼は神変不則の者、

え百、千の計略をその場で行っても、事が思い通りにゆくはずのことではない。

縦百千の策を居ながらにす共、 事行くべき儀に非ず、

ただ臨機応変の計策でこそ（勝てるだろう）と思って、同年三月二十日に都を発つ

唯臨機応変の計策にこそとて、

て、まず多田に下って、父の入道殿（源満仲）に御暇乞いをして、翌日は大井の光明寺<sup>(捌)</sup>にご参詣になり、今回の朝廷に背く者を差し障りなく退治する擁護の力をも

今度朝敵事故無く退治する擁護の力を加へ給はゞ、

しお与えになるのならば、大般若経六百卷を奉納できるだろうという旨を、一枚の願書にしたためて捧げ、一晩お参りして夜通し丹精こめて深く祈りなされた。

一夜参籠あつて終夜丹祈を凝らし給ひけり。

---

## 注釈

※壺・過ぎ去った貞元の年中……第 106 話参照。

※貳・目代……国司が私的に任命し、任国での政務を代行させた代官。

※参・大江山……現京都市・亀岡市にまたがる大枝山の事か。

※肆・千丈が嶽……現福知山市・宮津市・与謝野町にまたがる大江山の事か。

※伍・千方……藤原千方の事。『太平記』十六卷、「日本朝敵の事」によると、藤原千方は金鬼・風鬼・水鬼・隠形鬼の四鬼を使役し、伊賀・伊勢の二国を混乱に陥れる。

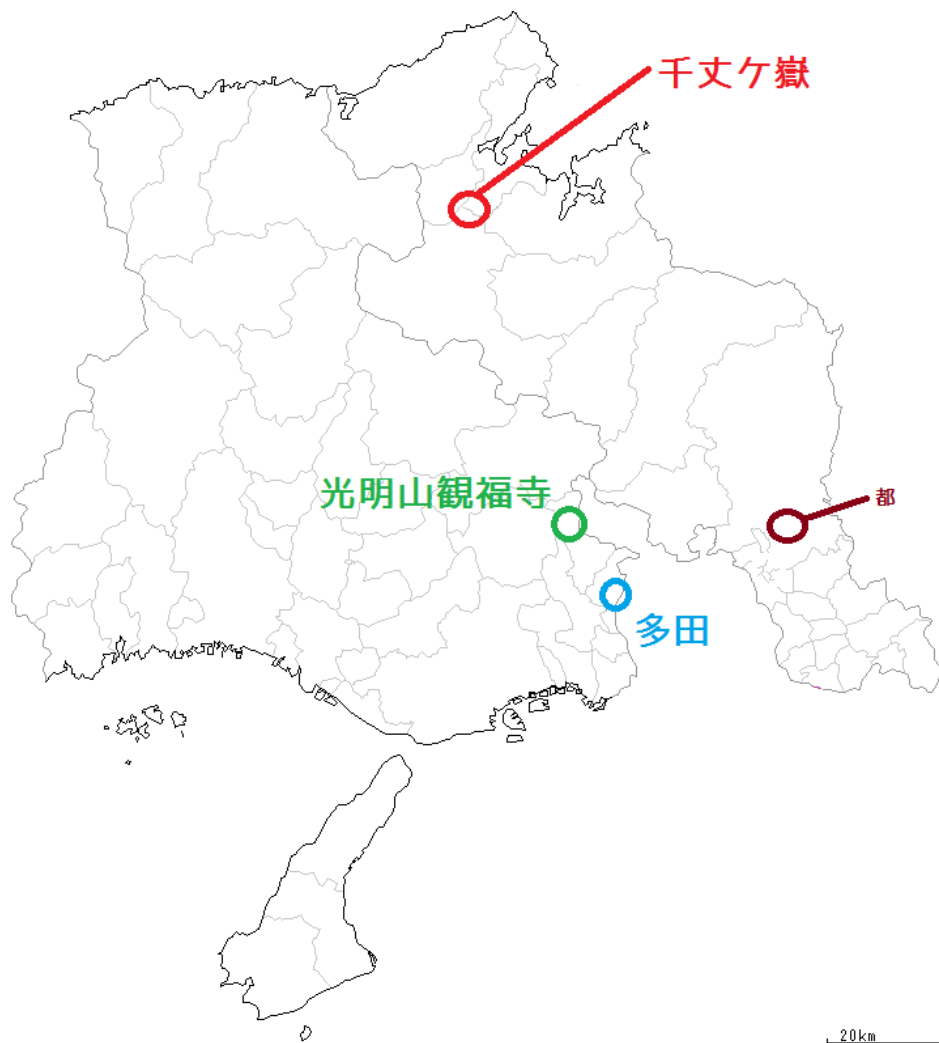
※陸・朝雄……紀朝雄の事。千方の鬼たちを「草も木もわが大君の国なればいづくか鬼の棲なるべき（この国土は天皇のものであるから鬼の棲み処は存在しないという意）」という和歌で追い払い、千方を倒した人物。

（参考文献：山下宏明校注『太平記 3 新潮日本古典集成』1983 年 新潮社）

※漆・伊勢国鈴鹿の鬼神……鈴鹿御前の事か。三重県鈴鹿山にいたという伝説上の女賊で、坂上田村麻呂に倒される。

※捌・大井の光明寺……現兵庫県三田市の光明山光明寺の事か。

< 動向メモ >



この注釈を書くために調べていた時に改めて感じたのは、本当に藤元は『太平記』が好きですね。作中の端々に『太平記』の作中に出る表現が多くちりばめられ、きっと何度も『太平記』を読み返し、執筆しているときも傍らには『太平記』をおいていたのでしょね。安直な考えですが、藤元は『前太平記』を書くとき、「平安時代の物語を書こう、太平記の前の時代だからタイトルを前太平記にしよう」ではなく、「太平記が好きだから、そのパロディを作ろう」だったのではないのでしょうか。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2017/4/23

改訂：2021/3  
海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※